

高齢者向けワークショップ型環境教育プログラムの開発と実践

—省エネルギー型ライフスタイルをテーマとして—

学校教育専攻 環境教育専修 1011709

来田博美

1. はじめに

本研究では、超高齢社会を迎え、省エネルギー型ライフスタイルの実践に向けて高齢者を対象としたワークショップ型環境教育プログラムを開発、試行し、その有効性の実践的評価を行う。

2. プログラムの作成

高齢者の持つ力である「過去の経験や知恵を生かすこと」を重視し、エネルギー消費を実感できるグループワークを構成し、自発的に考え、行動に結びつけられるプログラムを作成した。プログラム名は「エコの種をとりもどそう」とし、受講者数 20～40 人程度、所要時間約 80 分を想定した。ねらいとして、①「日常生活の中での、電気使用量の変化に気づく」、②「日常生活の中で、自分にあった電気使用量削減方法を見つけ出す」の 2 点を設定した。

＜説明 1：学習課題の説明（5分）＞
家庭でのエネルギー消費の削減の中で、自分たちがそれぞれ出来る方法を見つけ出すことを説明する。

＜活動 1：現状の確認(15分)＞
現在と過去の間取り図に自分達が所有している家電製品カードを並べ、電気の使用量を比較する。(JCOCA プログラム一部援用)

＜活動 2：気づき(15分)＞
各グループで過去の暮らしと比較し、特に使わなくてもよいと思われる家電製品を話し合い、各自 3 つ選び「生活見直しシート」に書き出す。

＜活動 3：電気使用量測定体験と提案(20分)＞
実際に係る電気使用量を電力計で測定する。

＜活動 4：気づきの共有と認識の深化(20分)＞
活動 2, 3 から、今後自分の生活の中でどのように電気の使用量を具体的に減らすかを書き出し、グループ内で意見交換・発表をする。さらに全体でも共有できるようグループ代表が順に発表し、共有する。

＜まとめ：総括（5分）＞
活動 4 を全体的にまとめ、今後の実践行動を呼びかける。

3. 試行実践結果

試行実践後、質問紙調査を行い、本プログラムを試行した 4 回の講座の計 67 人の受講者(以下「試行群」と記す)全員と、同テーマ・内容でワークショップを行わない講演のみの受講者(以下「比較群」と記す) 51 人全員から回答を得た。

対象受講者は、試行群、比較群とも 50 歳未満はおらず、大半が 70 歳以上であった。

「講座の難易」と「環境講座の難易意識」について、カイ二乗検定($p < 0.05$)の結果、試行群では有意差が認められ、比較群では有意差は認められなかった。本プログラムは、環境講座は難しいと考えている受講者に対しても、難しくない講座を提供し得るととらえられる。

家電製品の使い方に対する「考えの変化」についても、「考えが変わったか」という問いに対し、試行群では 90.8%が「そう思う」「ややそう思う」と回答しており、試行群と比較群間で有意差が認められた。本プログラムは、講演のみの講座よりも考えの変化を誘発しやすく、電気使用量削減への考えの変化を作り出したととらえられる。

同様に、電気使用量の「削減方法への気づき」についても試行群で 85.2%が「気づいた」「どちらかと言えば気づいた」と回答しており、試行群と比較群間で有意差が認められた。本プログラムは、講演のみの講座よりも削減方法に対する気づきを誘発しやすいととらえられる。

4. 考察

活動 1 のグループワークにおいて、積極的な参加、多くの発言があったことから、ねらい①は達成できたと思われ得る。事後調査結果よりねらい②も達成できたと考えられる。全体構成上は、活動 1、2、3 で多様な気づきを現出させ、活動 4 へ展開することができた。